# 23［評論］　『』

［１］　万物の変化するというのは、おのずからの理法であり、変化流行に移り進まなければ俳風もまた新しくなることがないという。芭蕉はたえず新しみを求めた。

［２］　したがって、芭蕉のを語ろうとすれば、その展開の全過程をあとづけなければならないということになる。だが、わたしは若干の不備を覚悟のうえで、問題をいくつかの点にしぼってみたいと思う。わたしにも、芭蕉の全展開過程をあとづけてみたいという気持ちがないわけではないが、それがただａリンカクをなでまわすような結果にならないためにも、ひとまず問題をしぼってみる必要があると思う。［　　Ａ　　］、①芭蕉の生活面をとりあげることからはじめようと思う。

［３］　それにしても、一人の詩人について、その作品からではなく生活あるいは伝記的側面から語りはじめることは、いささかｂジャドウめいてみえるであろうか。作家の実生活からただちにその文学を予測することはできないし、実生活にｃカンゲンしえないものがあればこそ、文学という独自な世界が存在するのだともいえる。考えてみれば、作品をかくという生活そのものが、すでに日常的・経験的な生活の概念からはみだした部分をもっている。むろん、生活と文学がまったく無関係に併存しているなどということはありえないし、その関係のありかたは、個々の作家、個々の表現形式のちがいにそくして具体的に検討されるほかないが、いずれにせよ、生活から文学を、文学から生活を、ただちに予測することはできないというその点では、例外はないといってよかろう。［　　Ｂ　　］、詩と現実生活との対応関係を測定することはｄヨウイではない。

［４］　例えば、「創造された詩的はそれに対応する現実の事実、人物、経験の模像である必要はない。それは通常、純然たる仮象、純然たる虚構であってもよく、本質的に虚の仮象であり、そしてそのような虚の客体が芸術作品なのである。つまりそれは完全な創作物である。」（Ｓ・Ｋ・ランガー『芸術とは何か』池上・矢野訳）

［５］　もっとも、「詩とはなにか」を、こんな具合に抽象化しようとした瞬間、それは、②詩の概念にとっては不純物とみなされるような要素をもふくみこむことで具体化された現実の詩──そこにある具体的な詩作品──から、あるていど遠のくように思われる。人間は、「完全なる創作物」を創造することができるという、あるいはまた、そうした自己完結的な「創作物」がこの世に存在しえてもよいはずだというひそかな願望と期待が、そこにある具体的な作品の、多義的な存在感に対抗しながら、思想として自立しようとする。③概念化にともなう一種の虚偽だともいえよう。しかし、そうした願望と期待が、他のジャンルよりも、詩を通して、より多く証明されつづけてきたという事実、［　　Ｃ　　］、詩がその願望や期待にふさわしい世界であるという事実もまた、認めないわけにはいかないだろう。だが、それにもかかわらず、わたしは、芭蕉を、作品からではなく、現実の生活形態のほうからみていこうと思う。なぜか。芭蕉の生活が、すでに、通念としての「生活」からはみだすものであり、いわば虚構された生活とでもいうほかないようなものだからである。なんらかの意味で虚構のない生活そのものといった「生活」などありえないということを前提にしたうえでも、なお、このことはいえるだろう。

［６］　芭蕉といえば、すぐ、旅との生涯をおもいうかべるほどに、芭蕉は旅の詩人、草庵の詩人としてまれて来た。だが、ここにある種のがないわけではない。われわれは、芭蕉とそのように馴染むことによって、芭蕉を、われわれの外──まさに旅と草庵という特殊な世界──に祭りあげ、そうすることで、芭蕉の危機感とたくみに絶縁する。敬して、しかも脅かされることのない関係を、そこに結ぶ。「芭蕉のきびしさ」といったふうの、感嘆まじりのも、しょせん、同類である。感嘆まじりの美文をっている限り、自分にはねかえってくるということはまずない。④はねかえりをうけとめることと、心情的な吐露とは別のものである。むろん、芭蕉のまねをする必要はさらさらないが、しかし、祭りあげることによって、芭蕉から真の意味で自由になれるとも思われない。危機感との絶縁は自由を意味しない。

［７］　なるほど、芭蕉は旅の詩人として馴染まれることで普遍化されたといえなくもないが、それは同時に風化の現象でもあった。われわれはいま、この馴染みの関係を破り、芭蕉の生きかたは奇怪だという率直なｅカイギから出発しなおす必要があるのではなかろうか。そのとき、はじめて、旅と草庵の生涯という独自な生きかたのもつ意味が、特殊性のなかに祭りあげられることなく、普遍的な場で問われることになるだろうし、その問いを通して、われわれは、敬して祭りあげるといった関係ではない新たな関係を、芭蕉とのあいだに結ぶことができるだろう。

●出題校

早稲田大学

●語注

芭蕉＝江戸前期の俳人、松尾芭蕉のこと。「芭蕉」は俳号。東北・北陸の紀行文学『奥の細道』などで有名。

模像＝模型の像。

仮象＝客観的実在性のない、主観的な見かけ。

草庵＝藁ぶきや茅ぶき屋根の、粗末で小さな家。

■覚えておきたい語句

□３全貌……………………物事の全体のすがた。全容。

□９ジャドウ……………………正当でないやり方。

□11概念……………………物事の概括的な意味内容。

□17純然たる………………まさしくそれに違いないさま。

□17虚構……………………事実でないことを、事実らしくつくりあげること。

□17客体……………………人間の意思や行為を受ける対象。客観。⇔主体

□19抽象化…………………個々別々の物事や見方から離れて、一般性を持たせるようにすること。

□23多義的…………………一つの事柄が多くの意味を持っているさま。

□24虚偽……………………真実のように偽ること。うそ。⇔真実

□24ジャンル………………芸術作品の種別や様式。

□27通念……………………世間一般に共通した考え。

□32頽廃……………………不健全な気風。

□33祭りあげる……………おだてて、高い位置につかせる。

□34絶縁……………………関係を断ち切ること。

□36吐露……………………心の中にある思いを隠さず述べること。

□39普遍……………………すべてのものに共通していること。⇔特殊

□39風化……………………いつのまにか、記憶や印象が薄れていくこと。

□40率直……………………かざらず、ありのままなこと。

□40カイギ……………………疑いを持つこと。あやぶむこと。

◆漢字

　本文中の二重傍線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　空欄Ａ～Ｃに入る最も適当な語句を、それぞれ次から選べ。（3点×3）

Ａ　ア　さしあたって　　イ　ただし　　ウ　むしろ　　エ　わざと　　オ　しかし

Ｂ　ア　いまだに　　イ　とりあえず　　ウ　それにしても　　エ　あくまで　　オ　わけても

Ｃ　ア　あるいは　　イ　あたかも　　ウ　ともかく　　エ　いずれにしても　　オ　つまり

〔　　　〕

問２　傍線部①とあるが、筆者がそう思う理由を端的に述べている一文を本文中から抜き出し、その最初の六字を書け。（句読点も一字とする。）（6点）

〔　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部②とはどのような要素か。本文中の筆者とランガーの表現の両方を用いて、三〇字以内で説明せよ。（7点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　傍線部③の説明として最も適当なものを次から選べ。（8点）

ア　芸術作品を抽象化しようとすると、かならずある種の具体性が不純物としてふくまれるということ。

イ　ランガーが詩を現実から切り離し過度に抽象化したために、詩本来の現実感覚がなくなってしまったこと。

ウ　詩は現実に開かれた多義的なものでありながら、同時に純然たる仮象であるという二面性が否定されるということ。

エ　詩を自己完結的な創作物として抽象化することで、具体的な詩作品の存在感を無視してしまうということ。

オ　芸術作品を完全なる創作物と考える限り、ランガーの言う「虚の客体」という考えが成立するということ。

〔　　　〕

問５　傍線部④の説明として最も適当なものを次から選べ。【読みのセオリー】（8点）

ア　芭蕉のきびしさを感じとることと、そのきびしさに反発することとは区別されなければならない。

イ　芭蕉の危機感を理解することと、それを句で讃美することとは区別されなければならない。

ウ　芭蕉を通して自己批判の精神を持つことと、芭蕉を模倣することとは区別されなければならない。

エ　芭蕉に慣れ親しんだ自分を内省することと、その自分に酔いしれることとは区別されなければならない。

オ　芭蕉のきびしさに脅かされることと、敬して遠ざけることとは区別されなければならない。

〔　　　〕

問６　本文の内容に合致しないものを次から二つ選べ。（6点×2）

ア　一人の作家を評価するにあたり、伝記的側面を切り離して、純粋に文学作品のみをとりあげるという方法には偏りがあると筆者は考えている。

イ　ランガーはその芸術論において、芸術作品は、実際の経験とは切り離すことのできる抽象的なものであると位置づけた。

ウ　筆者は芸術作品の中に存在する不純物こそが、芸術を芸術たらしめるものであると考えている。

エ　筆者は、芭蕉を旅と草庵の生活という特殊性のなかに祭りあげている限り、芭蕉から真に自由になれるとは思っていない。

オ　芭蕉を旅と草庵の詩人であるという概念で普遍化することによって、芭蕉文学の本質から遠ざかるという現象が生じた。

カ　人間は、「完全なる創作物」を創造することを願うあまり、思想としての芸術論と具体的な作品の存在感とを対抗させようとする。

〔　　　〕〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ輪郭　ｂ邪道　ｃ還元　ｄ容易　ｅ懐疑

問１　Ａ＝ア　Ｂ＝オ　Ｃ＝オ

問２　芭蕉の生活が

問３　現実の事実、人物、経験などの、詩人の現実生活という要素。（28字）

問４　エ

問５　イ

問６　ウ・カ

【現代文読解用語200】

問　次の言葉の意味をそれぞれ後から選べ。

184あげつらう（　　）

185間髪をいれず（　　）

186にわか（　　）

187なまじい（　　）

188期せずして（　　）

189否応なく（　　）

190挙げ句（　　）

ア　すぐに

イ　急に変化が現れるさま。

ウ　中途半端なさま。

エ　欠点や短所などを取り立てて批判する。

オ　思いがけなく・偶然

カ　結局のところ。

キ　有無を言わせず。

【解答】

184エ　185ア　186イ　187ウ　188オ　189キ　190カ

【読みのセオリー】

★傍線部の内容を部分ごとに正確に把握する

　傍線部全体の意味を漠然と読むのではなく、各部分ごとの意味・内容を本文中の別の表現に置き換えていくこと。部分ごとに置き換えられた意味内容を再構成することによってはじめて、傍線部全体の正確な内容把握が可能になる。

〔要　約〕

要約の重点は、筆者の主張である［６］・［７］段落。［１］・［２］段落は、筆者の基本姿勢の提示。［３］～［５］段落は芭蕉のみならず文学全般に対象を広げているが、芭蕉について述べている［５］段落の後半部は要約に反映させたい。

　　　　　↓

　芭蕉を作品からでなく、生活から語りはじめるのは、それ自体が虚構というべきものだからだ。芭蕉を、旅と草庵という特殊な世界に祭りあげず、生きかたの奇怪さへの問いを通して、芭蕉との新たな関係を結ぶべきだ。（99字）

〈筆者＆出典〉廣末　保（ひろすえ・たもつ）一九一九（大正8）～一九九三（平成5）年。高知県生まれ。近世文学研究者、演劇評論家。東京帝国大学文学部国文学科卒業。近世（江戸時代）の文学、特に芭蕉･近松･西鶴などの元禄期の文学・芸能研究で有名である。柳田國男や折口信夫の民俗学研究方法にも学び、「悪場所」・「遊行民」の存在を文化史・精神史の角度から考察した。本文は、『芭蕉』（平凡社、一九九三年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

＊問３追加

問　傍線部②「詩の概念にとっては不純物とみなされるような要素」に当てはまるものを次から選べ。

ア　虚の客体

イ　現実生活

ウ　個々の表現形式

エ　具体的な詩作品

オ　文学

［答］　ア

＊問４差し替え

問　傍線部③「概念化にともなう一種の虚偽」とあるが、どのような虚偽なのか説明せよ。

［答］　現実に存在する具体的な詩作品を無視して、ありもしない自己完結的な創作物の存在を想定してしまうことの虚偽。

＊問５差し替え

問　傍線部④「はねかえりをうけとめることと、心情的な吐露とは別のものである」とあるが、何と何とが別なのか。本文中の表現を用いて説明せよ。

［答］　芭蕉の危機感を理解することと、それを感嘆まじりに賛美することとは、別ということ。

■要約の方法　★各段落の柱の文をもとに各段落を要約する

《本文を形式段落７段落で考える》

［１］・［２］　芭蕉の生活面から、芭蕉を語ることをはじめるという立場

［３］・［４］　詩作品と詩人の実生活との関係について

［５］　　　芭蕉を作品からではなく現実生活からみていこうとする理由

［６］・［７］　芭蕉の生活の特殊性を普遍的な場で問いなおす必要性の主張

《他の段落の説明や理由を述べている段落を省き、柱の段落を絞り込む。さらに柱の段落をつなぎ合わせる》

筆者の主張として、芭蕉の現実生活のとらえ方を直接的に述べているのは［６］・［７］段落である。［１］～［５］段落は、芭蕉を語る基本姿勢として現実生活をとりあげることと、その理由を述べている部分である。［６］・［７］段落を中心に、［５］段落の後半部の理由も要約に反映させたい。

■本文の要約■

芭蕉を作品からでなく生活から語りはじめるのは、それ自体が虚構というべきものだからだ。芭蕉を旅と草庵という特殊な世界に祭りあげず、生きかたの奇怪さへの問いを通して、芭蕉との新たな関係を結ぶべきである。（99字）